

第2号

札幌くらぶ

発行／札幌くらぶ
 (財)札幌交響楽団内
 札幌市中央区中島公園1番15号
 (札幌コンサートホール内)
 電話 011-520-1771
 F A X 011-520-1772



楽員と第二回交流会 音に酔い、ビールに酔った二時間半 緑萌える盤溪で、

去る5月24日土曜日、市内中央区盤溪幼稚園の体育館で、総会と札幌楽員との交流会を開催しました。80人の会員と30人の皆さんに参加していただき、和やかで楽しい大集会になりました。

第一部の総会が終了すると同時に、乾杯で交流会が始まりました。

今回も、札幌メンバーが室内楽を演奏して下さいました。ファンファーレや馬のいななきが楽しい「草競馬」を演奏して下さいた金管五重奏では、チャメツケたっぷりのパフォーマンスに会場が沸き立ち、弦楽三重奏の演奏では、静寂の中、音楽に聴き入りました。会場にお借りした体育館は、木造のかわいい建物で、プレーヤーにも、音がよく響いて、とても演奏しやすかったと好評でした。

楽員の自己紹介では、入団歴最短24日目のヴァイオリンの竹内愛さんから、最長のメンバーまで、普段人前で話すことがないのでと照れながら、どなたも個性豊かに、出身地や趣味の話をして下さいました。「娘も札幌にいます」というパパさんプレーヤー、なぜかそっくりな人が二人いると思ったら、「僕たち双子です」という三原ブラザーズなど色々な方がいます。楽員とビールやジュースを注ぎ合ったり、あこがれ(?)のメンバーとツーショットで写真におさまったり、電子メールのアドレスを交換し合っている会員もいました。楽員の一人ひとりが身近な存在に感じられたひとときでした。



歓談に花が咲くと、ベルン地方の衣装をつけた札幌の事務局次長吉田さんが長い長いアルプホルンを持って現れ、あの牧歌的なホルンの音を響き渡らせました。吉田さんも昨年の8月まで札幌のホルン奏者でした。さらに、オーボエの岩崎さんも飛び入りで演奏して下さい、嬉しいハプニング続きです。まさに素敵なお酒と音色とに酔った二時間半でした。



指揮者にきく

群馬交響楽団音楽監督

たか
せき
けん
さん

音楽が好きなのは、
もっとコンサートに来て欲しい！



高関健さんのプロフィール

1955年東京生まれ。
78年桐朋学園大学卒業。
78年から85年までベルリン留学。
85年日本フィルハーモニー交響楽団定期演奏会を指揮し、デビュー。
88年から92年まで札幌専属指揮者を務める。
93年群馬交響楽団音楽監督、94年新日本フィルハーモニー交響楽団指揮者に就任し、現在に至る。
97年4月から大阪センチュリー交響楽団常任指揮者に就任。

1997年4月27日、芸術の森アートホールでの第九のリハーサルの前に、群馬交響楽団音楽監督の高関健（たかせき けん）さんに、お話をうかがいました。

高関さんは、4月28日に、厚生年金会館で行われた北海道郵政局「第九コンサート」の指揮をなさいました。

—— 札幌は、定期会員が1,100人くらいだそうです。札幌は170万都市で、近郊のベッドタウンを含めると、人口は200万人以上になりますから、もっと定期会員が増えてもいいのではとされています。

高関 そのとおりだと思います。日本の音楽会には、音楽が好きでしようがないという人たちが聴きに来てくれるのですが、そうすると、どうしても少数派になってしまう訳ですね。

その点、アメリカでは、オーケストラは民間の寄付を中心に運営されていますから、定期会員になって切符代を払うだけではなく、オーケストラ・ファンドへの寄付にランクが幾つもあると、たとえば、最高ランクの金額を寄付した人たちは、常任指揮者とお食事ができるとか、コンサートホールの椅子の背に誰そのチェアとプレートが付けられるとか、色々な形で市民が参加できる。それも一つのやり方だと思うんですね。

音楽のことを良く知らなくてはいけなとか、そういう必要は全然ないので、音楽が好きなのは、もっとコンサートに来ていただきたいと思います。

札幌のお客は本当は温かい

—— 札幌との係わりは、長いんですね。

高関 初めて振ったのが、86年4月21日のほくでんファミリーコンサートで、市民会館でした。ワーグナーのマイスタージンガーの前奏曲、モーツァルトの交響曲38番、ベートーヴェンの4番のピアノ・コンチェルト、チャイコフスキーの「くるみ割り人形」の組曲です。（ぶ厚いシステム手帳を見ながら、スラスラと）

—— ずいぶんたくさんですね。

高関 30分番組の4回放送分なんです。

それからは、継続的に、最低1年に1回以上来ています。88年から92年までは、専属指揮者でした。

—— 指揮をしていて、札幌のお客はいかがですか。

高関 お客さんは礼儀正しいんです。最初は、終わった時、ダメだったのかなと思ったくらい。

当時は、定期の会場が厚生年金会館だったから、お客さんが遠かったんですよ。

前回96年1月の定期は、市民会館でしたから、お客さんとの距離が近くて、温かい感じだったですね、印象としては。

指揮者は背中にも眼がある

—— 背中を向けていても、お客さんたちがとても熱中しているとか、超現代曲でポカンとしているというような客席の雰囲気はわかりますか。

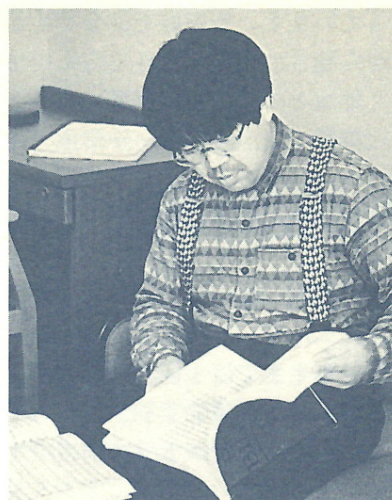
高関 わかります。それを感じながら、やっていないと、舞台の上で指揮してるだけでは、プロとしてはダメだと思います。

受けてるなと思ったら、もっとやってやろうとか、やっぱりそういうことを考えながらやるのは当然です。早い話が芸人ですからね。

—— お客さんの様子もそうですが、楽員の人たちと演奏していて、今日は、とても盛り上がったとか、そういうことはありますか。

高関 あります。だから、練習をいくら積んでも、うまくいかない日もありますし、逆に、ちょっと練習が足りなかったけれど、大丈夫かなという時でも、本番はすごくうまくいったり、同じプログラムで複数の演奏会をしても毎回違いが出てきます。それは不思議なんですね。必ずしも力んでうまくいくという訳じゃなくて、神のみぞ知るっていう感じです。

—— 指揮者の方は、何ページかまとめて楽譜



ベートーヴェンの「第9」の楽譜をめくりながら

をめくっているように見えますが。

高関 見ながら指揮をしてるということは、あまりないですね。一応全部めくっていきますけれども、だいたい音楽が流れているよりも早くめくっているんですよ。追っかけながら振っていると遅いんですね。

演説をする時と同じで、原稿をちゃんと下読みしておいて、文章の頭の言葉が出てくれば、自然に終わりまでいく、そのくらいまでやっておかないと。

まあ、第9のように頻繁にやっている曲は、当然そうやってきますが、初めてやる曲でも、そうしておかないといけないと思いますね。

—— すごいストックですね、頭の中が。

高関 でも、僕ら、レパートリーといっても、そんなにたくさん持っている訳ではないですから。

レパートリーで、いつでもできると思ってやっているのは、500曲くらいでしょうか。



芸術の森アートホールでの練習風景

群馬の子どもは、みんな群響を聴いて大きくなる

—— 音楽監督をされている群馬交響楽団は、終戦の年にできたオーケストラだそうですね。

高関 そうです。2年前に創立50年を迎えました。N響に次いで、日本で2番目に古いオーケストラです。

定期演奏会の会場の群馬音楽センターは、昭和36年にできたんですが、当時、市民から寄付を募って、タバコ1箱の代金をみんなが寄付しようということで、作ったんです。それ以来、ずっと、ここで演奏会をや

っています。新幹線で50分ですから、東京から聴きに来てくださる方もいますよ。

—— 地域との関係で、群響の特色というのは、
高関 群響では、小学生・中学生・高校生のためのコンサートを、音楽教室という名前ですごくたくさんやっていて、それが特徴なんです。

群馬県では、ほとんどの子どもが、小学校に入って、3年生までに1回、4年生から6年生までに1回、中学校で1回、高校に進めば、高校で1回、だから卒業するまでに4回オーケストラの演奏会を聴けるんですよ。

—— 群馬の子どもはいいですね。
ところで、クラシック以外の曲は聴かれますか。

高関 最近、アルゼンチン・タンゴに凝ってますよ。

—— ピアソラがずいぶんはやっていますが、
高関 もっと古い時代のものが好きです。ファン・ダリエンソなんか良いですよ。

—— オフの時は、何をなさってますか。

高関 ホーッとしてます。

—— 積極的な体力づくりとか健康づくりは。

高関 自転車には良く乗ります。車の免許を持っていないので、近くの買物くらいは、ほとんど自転車で済ましちゃいます。

新しいコンサートホールを楽しく使って

—— 6月の定期では、長い間会場だった市民会館とお別れということで、告別を指揮されますね。

高関 演出を考えていますので、是非、お楽しみに。

今日、新しいコンサートホールを見せていただいたんですが、一体感があって、すごくいいホールですから、もっと定期会員

が増えるといいですね。

京都市交響楽団でも、新しいコンサートホールができたのがきっかけで、定期会員がグンと増えて、最近ではほとんど満員になるんですよ。

—— 先日、札幌の楽員の方たちにも何人か入っていただいて、「札幌くらぶ」の打合せがあったのですが、新しいホールは、ロビーも、かなり広いらしいので、演奏会が終わった後、金管楽器でも出てきて、パンパカパーンとお見送りをしたらおもしろいのか、色々な話が出ました。

高関 逆に、お迎えしてもいいかもしれませんよ。それから、N響がやっているんですが、定期演奏会が始まる前、15分間くらい、ロビーでオーケストラのメンバーが室内楽を演奏するんです。そういうこともできますね。

あと、難しい曲を演奏する場合は、指揮者や作曲家自身が説明をするとか、色々なことをやるといいと思いますね。

—— そうですね。札幌の定期演奏会の会場は、7月から、新しいコンサートホールですということも、うんと宣伝しなくては。

高関 宣伝をして、たくさんの方に「札幌くらぶ」にも入っていただいて。

《臨時インタビューの感想》

翌日の第9は、札幌が初めて、新たに出版された原典版の楽譜で演奏するというので、総譜を見せていただきながら、ベートーヴェンは楽譜には厳密な人で、出版された楽譜の訂正表をどンドン出していたこと、音を足したりする厚化粧風の演奏がはやっていた時期があったことなどをお聞きし、プロフェッサーの歯切れの良い授業を受けているみたいな、予定時間を大幅にオーバーしてしまった、楽しいインタビューでした。(T.K.)

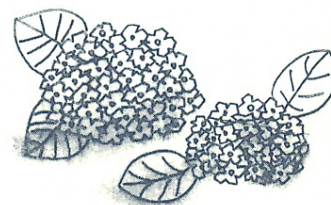
オーケストラなんでもQ&A

Q. 現在、世界を代表するオーケストラのサイズは何型というのですか。

また、何人編成ですか。

A. オーケストラの編成は木管楽器（フルート、オーボエ、クラリネット、ファゴット）の数がそれぞれ1本づつか、2本づつかで1管編成、2管編成と呼びます。この管楽器の数に見合った弦楽器の数が必要になり、30人程度の室内オーケストラから世界のトップを行く120人のオーケストラまで様々な編成があります。

一方、ご質問の何型の言い方は主に弦楽器の編成を指します。弦楽器は音符の数も多く休みが少ないため、演奏中に全員が譜めくりで演奏の手を



■札幌コンサートホールを知らう（上）

サントリー・ホールと同じワインヤード型

竹津宣男

今年7月4日に中島公演に誕生する札幌コンサートホールには、2008席の大ホールと453席の小ホール、大リハーサル室、小リハーサル室が2つ有ります。それぞれのホールには余裕のある豪華なロビー、数多くの楽屋、席数分のクローク(コート類の預かり所)、大ホールのロビーには3カ所、小ホールには1カ所のカフェ・バーが用意されています。また、日本一数の多いトイレもあります。

小ホールはシューボックス(靴箱)型と呼ばれる長方形でホールの片方にステージがしつらえられ、クラシックの演奏だけでなく、簡単な舞台物が出来るよう、全自動の照明装置があり、スクリーンも映写機も用意されています。しかし、音楽専用ホールとして国際的に通用する高いレベルの豊かな音響を客席に伝えるために、天井を高くしたり、2階の左右に一つづつあるバルコニー席の背後にも大きな空間を採り、気積(一人当たりの空気の分量)を稼いでいます。実際に音響テストをした結果、質の良い豊かな響きが証明されました。



大ホールはアリーナ型ともワインヤード型とも言われ、ステージを客席が取り囲む、段々畑のようなホールです。どの客席からもステージは身近に見えます。

これまで昭和57年に出来た大阪の「ザ・シンフォニー・ホール」、その5年後東京に出来た「サントリー・ホール」は共に基本的な構想が同じです。

この種のホールが札幌に向いているのは、上記2つのホールのオープニングで、どちらも札幌の演奏が初めてホールの真価を発揮してくれた、とそれぞれから感謝されていることでもわかります。

札幌の北海道内の演奏会では体育館が会場になる機会が多く、普段から作り付けの舞台のない会場での鳴らし方を心得ているからでしょうか。

札幌コンサートホールは舞台関係者の意見を十分取り入れて作られたため、客席側の豪華さは勿論、楽器搬入口からステージまでと楽屋を同じ平面に納めたため、舞台裏もスツキリと使いやすく、見学に訪れた海外のオーケストラの関係者が「見事だ」と激賞していました。

札幌に素晴らしいホールが出来たという噂は、既に世界に広がっているようです。今後、札幌が、北海道が世界に誇れるものの一つになることは間違いありません。

休める瞬間が出来ないよう、誰かが譜めくりをする必要があります。そこで2人で1つの楽譜を見ることになり、弦楽器の編成は第1バイオリン、第2バイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバスの順に偶数の組み合わせになる事が多いのです。例えば、5管編成で最も大きな弦楽器のサイズは20型と呼ばれ、第1バイオリンから順に20人、18人、16人、14人、12人となります。この場合、弦楽器だけで80人の編成になり、管楽器と打楽器奏者を合わせると120人を遥かに越えてしまいます。そこで近代では世界の代表的なオーケストラも普段は18型に収めています。

Q. 札幌の楽団員は何人ですか。

A. 札幌の楽員の名簿は、定期演奏会のプログラムの裏表紙の内側に載っていますが、現有勢力は80人です。なお、演奏会では、弦楽器が会場や曲目によって、10型から16型まで幅があります。



PLAYER'S TALK

札幌 首席トロンボーン奏者

たなか とおる
田中 徹 さん

札幌で、ほぼまん中の一番後ろ、全体を見おろすことができる、眺めの良い位置に座っている、トロンボーンの田中です。

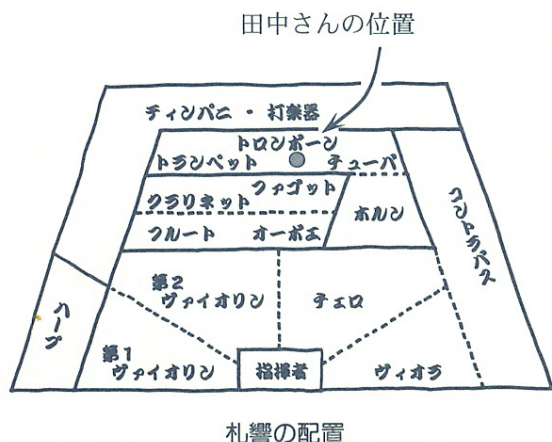
最後の審判に鳴り響く妙なるラッパはトロンボーン

トロンボーンは、ベルの直径が大きくなっただけで、今と同じ形のまま15世紀から活躍し、教会で聖歌隊とともに使われていた古い歴史のある楽器です。交響曲で使われるようになったのは、ベートーヴェンの5番「運命」の第4楽章が多分初めてだと思います。演奏会では、80人のフルオーケストラのメンバーを相手に、3人で対抗していますが、トロンボーンが印象的に活躍する曲としては、pのコラールではブラームスの交響曲、いわゆるトロンボーンらしいffではマーラーやワーグナー。そして、何と言ってもラヴェルのボレロのソロが有名でしょうね。

モーツァルトは、41ある交響曲でトロンボーンを1曲も使ってくれないんですが、レクイエムで、最後の審判の時に鳴り響く妙なるラッパというのは、トロンボーンなんです。

「おい、ちょっと」と「クジ引き」で、決まった人生

本当はトランペットをやりたくて、中学で吹奏楽部に入ったんですが、僕が座った位置が、ちょうど



田中徹さんとトロンボーン

トランペットとトロンボーンの間で、左隣に座っていたトロンボーン先輩に「おい、ちょっと、これを持ってみる。」と言われ、つい振り向いてしまったのがきっかけで、それから20年以上たちました。

高校の吹奏楽部では、定員2人のところ、たまたま中学でトロンボーンを吹いていたのが8人入部して、話合いの結果、クジ引きで決めようということになり、運良く当たったんです。あの時クジに当たらなければ、今、プロになっていなかったかもしれません。

芸大の大学院を出た後、東京でフリーで活動していましたが、かなり苦しかったですね。千葉のオーケストラのエキストラとして、小・中学校を回る音楽教室の仕事で、月曜から土曜まで毎日、1日に午前・午後と2校回って、1年間に百校は行くという生活を5年以上続けました。日銭をいただいて、夜飲みに行って、明日はどこだっけ、じゃあ片道の交通費はこれだけあればいいねと、それだけ残しておく訳です。現地集合ですから、千葉県地図を買って、出かけて行くのですが、たまに、ギャラは振込みというところがあって、帰る金がない！という悲惨な目にもありました。

オーケストラをめざす少年少女の皆さんへ

僕は長野生まれですが、札幌の楽員の、道外・道内出身の比率は半々という感じです。

トロンボーンは、1つのオーケストラに3~4人の定員ですから、激戦地区です。オーディションでは、30~60人ものプレーヤーが受けに来ることもざ

からです。(ちなみに、僕が7年前に札幌に入団した時のオーディションは21人でした。)

楽員は楽器はだいたい自前ですが、金管楽器は木管楽器や弦楽器に比べると、あまり高くありません。僕の持っているので、何十万円というところです。

値段の差というより、金管楽器は、技量とか、持って生まれたものという、演奏者の差によるところが、すごく大きいのです。発音の源になるものが楽器そのものにはついていないので、唇の振動をそのまま楽器に伝える、発音の源が自分の方にあるという点で、まるっきり声楽家と同じです。あと、トロンボーンの場合は、どちらかというと、腕が長い方がいいですね。

札幌を支えてくださる市民の皆さんへ

札幌くらぶの交流会には、2回とも出席させていただいています。我々のオーケストラを支援して下さる方々が本当にたくさんいらっしゃることを、改めて知らされました。こういう交流会を通して、ステージと客席の距離をどんどん狭めていけたらなと思います。ぜひ、またお会いしましょう。

from 「札幌くらぶ」

「札幌くらぶ」は札幌を応援するグループです。札幌を好きでたまらないという方々が集まり、昨年8月に結成しました。会の目的は、札幌をもっと知り、楽団員と親交を深めることです。「札幌くらぶ」も年4回発行します。

入会を希望する方は定期演奏会の会場で入会を受け付けています。また、札幌の事務局でも常時受け付けています。年会費は2000円です。

札幌の事務局が本年4月から札幌コンサートホール(kitara)に移動しましたので、札幌くらぶへのお問い合わせ先も変更になりました。新しいお問い合わせ先は、

札幌市中央区中島公園1-15 (札幌コンサートホール内)

札幌交響楽団事務局内

札幌くらぶ

(TEL 011-520-1771/FAX 011-520-1772)

です。

皆さん、お友達を誘って「札幌くらぶ」に入会して下さい。

お友達を誘って札幌の定期演奏会の会員になりましょう。

札幌物語 III

暖房完備? の練習所

昭和36年に生まれた札幌は、旧中島児童会館のホールの客席部分を使って練習を始めました。中島公園は、その昔、スノーフェスティバルの始まった場所ですし、冬も楽しい公園でした。

池はスケートリンクになり、一日中スケートを楽しむ老若男女が途絶えませんでした。札幌の楽団員も何人かはスケート靴持参で練習に現れ(中には、高校時代はスピードスケートの選手だった人もいました)、昼休みや練習終了後、徒歩1分のスケートリンクで思い切り楽しんでいました。

中島児童会館のホールの客席は南北に長い長方形で、幅10m、奥行き20mほど、高さは約5.5mありました。このホールの西側の壁際の中央に指揮台を置いて、オーケストラは西向きにセットされていました。

冬には、家庭用の貯炭式ストーブが2台取り付けられました。現在の札幌は都市型になったのと、地球温暖化とのおかげでマイナス10度は減多に経験しなくなりましたが、昭和36年頃は雪も多く、気温もマイナス10度以下になる日が



沢山ありました。2台のストーブは、それぞれ、ホールの中程に取り付けられ、ストーブが真っ赤になるまで焚かれるので、ロストルはすぐ駄目になり、本体も金属がすぐへたって、熱輻射は劣化し、いくら焚いても暖かにならないため、一冬にストーブを2度も取り替えなければならぬ冬もありました。

ストーブ本体と壁のメカネ石までのブリキの煙突は5mもあるため、煙の吸い込みが悪く、練習が始まって30分もすると煤が詰まって燃えなくなり、室内に煙が立ちこめ、間もなく中に溜まったガスが爆発して、天井から煤が降ってきます。管楽器奏者は息を吸い込めなくなり、全員目がチカチカして楽譜が読めなくなりました。一時ストーブを止めて練習を続け、休憩時間に煙突を叩いて煤を払い落とすまでは火の気のない練習室になり、冬は冷房完備となりました。

弦楽器奏者は両手の感覚が無くなり、管楽器奏者はコートを羽織って、その中に楽器を抱え込んでピストンが凍らないよう暖めていました。

(Y. T)

FAN NETWORK

新ホールへの期待

確か、7～8年前の頃と思うが、音楽専用ホールを作ろうという音楽愛好家による熱い盛り上がりが起こり、私達音楽に関わる者は教え子やその父兄の皆さんにその主旨を説いて廻り100円の募金をお願いした。

札幌が創立された昭和36年頃、聴衆1,000人を上回りオーケストラが乗れるステージを持ったホールは札幌市民会館だけだったと記憶しているが、その後ホールも増え、札幌は勿論のこと外国のオーケストラや市内の色々な演奏団体の演奏会を聴く機会が多くなり、音楽愛好家は優れた演奏を選んで聴くことが出来るようになった。

しかし、市内どのホールも全て多目的なものであり演奏を聴く側、演奏をする側それぞれ不満や欠点があった。演奏者も聴衆も常に日本の数カ所にある音楽専用ホールのような所で演奏したい、素晴らしい演奏を聴きたいというのが夢であった。

あの100円募金から始まった札幌の音楽専用ホールも、多くの音楽愛好家、期成会で努力された方々、当局の皆様の情熱でほぼ完成し、いよいよ7月にこけら落としとなった。名称も「札幌コンサートホール」(愛称:キタラ)と決まり、中島公園の自然に恵まれた環境にマッチした外観は数々のホールには無い落ち着きを醸している。

館内は荘厳なパイプオルガンを抱えた大ホールの他、小ホール、大リハーサル室、小リハーサル室、楽屋・控室、トラックヤード等々大変に使いやすくロケーションされている。

音響が又素晴らしく、数々のホールの長所を全て配慮された、日本一は勿論のこと、世界の中の優れたホールの一つと言って過言ではないと思う。

私達の夢が実現し感激するとともに、次代を担う青少年の為に素晴らしい財産を残すことが出来、此の上無い喜びに満ちている。何時までも大切にしていきたいものである。

元札幌ホルン奏者 高橋裕典



まだまだ市民会館

昭和36年9月6日夜、札幌市民会館は待望の地元プロオケ初公演の熱気に溢れ、熱演の指揮者荒谷氏の袖ボタンが飛び、ダブルのカフスが開いてヒラヒラと舞った。

この第一回定期の3年前に竣工したこのホールの音響設計は、当時NHKの技研におられた永田穂氏(現永田音響設計(株)社長)の監修によるもので、あの残響可変装置は当時最先端のアコースティック技術であった。札幌はこの良い会場に恵まれたこともあり順調に伸びていったのだと思う。拍手をしたときの場内の一体感も素晴らしい。ボストン響やベルリン・フィルをここで聴けたのも幸せだったと、今思う。と言うのは、市民会館の音がスタンダードだと思っていて、響きの良いホール(気積が大きくないので、フルオケの大音響にはやや弱いけど)だということ、はっきりした認識は、あの頃特になかったからである。

この2月、建築に携わっていたコンサートホールの音響テストの際お会いした永田社長に、故障して動かなくなっていた残響可変装置を直したことを伝えたと、とても喜んでおられた。

電気音響装置も最近一新した。

古くはなくても、音よし見よし足よし、そして出会いよし。札幌定期が移っても折々通いたい大都市の貴重なコミュニティーホールである。

元札幌市建設局長 西村公男

編集後記

白いアカシアの花の香りのシャワーを浴びて、幸せな気分でご過ごせる季節です。

昨年6月の創刊準備号、今年1月の創刊号に続き、半年ぶりに会報をお届けします。札幌くらぶ発足2年目の9年度(4～3月)は、この号を含め年4回発行する予定ですので、指揮者の方々に始め札幌の楽員の皆さんの素顔や肉声をできるだけたくさんお伝えし、会員の皆さんの声も紹介する双方向の会報にしていきたいと思っています。でも、申し訳ありませんが、不定期発行は当分解消できません。お許しを。(T.K.)

今回の会報に、イラストを提供して下さった会員がいらっしゃいます。素敵なイラストだと思いませんか♥♥♥。ありがとうございます。

6月25日は、市民会館での最後の定期演奏会が行われます(ました)。そこで、今回の「Fan Network」では、新旧の定演会場にゆかりのある方をお願いして、思うところを記していただきました。これを読んでいらっしゃるあなたも、市民会館やkitaraホールについての感想をお寄せ下さい。もちろん、札幌に関することでしたら何でも構いません。(いちろう)